

ヒット商品を支えた知的財産権

VOL. 50

太陽熱温水器の定番 「ゆワイター」

商標登録 第1501603号 他
実用新案 第1452991号 他

太陽熱温水器の代名詞ともいえ、矢崎総業株式会社の「ゆワイター」の発売は1976年のことである。同社の吸収冷凍機の技術を活かした、太陽エネルギーによる冷暖房・給湯システムの実用化が開発の契機だったと、環境システム開発センター副センター長の浅井俊二さんはいう。その背景には、第1次・2次石油危機時の原油の安定確保に対する危機感と同時に、国際的な太陽エネルギー利用の高まりがあった。

74年、太陽熱により冷暖房・給湯ができる実験ソーラーハウスを完成し、世界ではじめて太陽熱による冷房を行つた。このために開発したのが、太陽集熱器「ブルーパネル」である。透過性の高い半強化ガラス(のちに半強化白板ガラス)を採用、温水に対する耐食性に優れたステンレス鋼などの新素材を、メーカーの協力を得て開発した。単独開発した選択吸収面との製造方法は、国内はもとより、海外30カ国以上で特許出願した。

この時期は太陽熱利用の市場が限られていたことから、ブルーパネルのコスト低減を図り、市場拡大するための商品化が、実用新案として公表され、ロイヤリティ収入が入った時は、至上の喜びだつたと考案者の環境エネルギー機器部住設企画部主管の吉広孝行さんは振り返る。以来30年以上にわたり、ゆワイターは時代に応じて進化し続け、ロングセラーとなっている。

1941年創業の矢崎総業は、自動車用のワイヤーハーネスや各種計器のメーカーとして成長を続ける一方で、空調システムやガス機器などのエネルギー機器の分野でも事業を拡大してきた。法務室管理部部長の勝亦佳仁さんは、特にエネルギー機器の営業部門は特許を営業戦略に活用することを常に考えてくれるで、特許的にもやりがいのある仕事ができると語る。

特許調査 よもやま話

特許出願があると、特許庁では、その技術内容に応じて国際特許分類を付与します。出願から1年6か月が経過すると、その出願が公開され、その公報(公開特許公報)に国際特許分類が表示されます。この国際特許分類を頼りに、自分の興味のある技術に関する特許出願を探すことができます。例えば、ゴルフクラブの非金属シャフトに特徴があるものは「A63B53/10」という国際特許分類が付きます。しかし、国際特許分類表のどこにも該当しないような発明が出願されることがあります。そのような特許出願があると特許庁は分類付与をあきらめるようです。そのような出願の公開特許公報には、国際

特許分類の項目のところに「分類不能」と表示されます。このような分類不能の出願だけを探すことはできるでしょうか?特許電子図書館の公報テキスト検索というサービスでは国際特許分類を入力して特許出願を検索できますが、国際特許分類として「分類不能」を入力してもエラーになります。有料のデータベースのPATOLIS-IVまたはPATOLIS-Jを使うと、国際特許分類として「X99X999/99999」または「X99X?」を入力すれば、分類不能の出願を検索できます。特許出願では95件がヒットします。中には、例えば、発明の名称として「陽子・中性子の求心力」(特開2002-354898)、「世界未来設計手法」(特開2002-119099)、「空間エネルギー」(特開平4-96700)のようなものがあります。何とも不思議な世界が現れます。

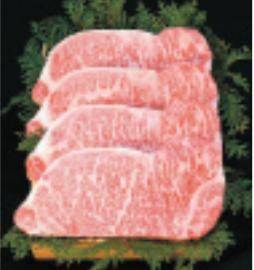
(弁理士 鈴木利之)

シリーズ JAPAN 特産品 「宮崎牛」

商標登録 第5028588号

燐々と輝く太陽と遙かに広がる日向灘。幽谷の深山。そこに流れる大河、清流。四季を通して大自然に恵まれた宮崎の大地で「宮崎牛」は生産肥育されています。「宮崎牛」は、宮崎県内で生産肥育された黒毛和牛のうち、日本食肉格付協会が定める格付基準の肉質等級が4等級以上(5等級が最高等級)のものです。和牛のオリンピックとも言われる昨年(2007年)の全国和牛能力共進会では、宮崎牛は9部門のうち7部門で金メダルを獲得し、さらに最も優秀な牛に贈られる「内閣総理大臣賞」も獲得し、宮崎牛の品質の高さが全国に知れ渡ることになりました。年間6場所の大相撲本場所では宮崎牛一頭分が優勝力士に贈呈され、キャンプ中のプロ野球の球団等にも宮崎牛は差入れされております。東国原知事の指揮の下、宮崎県では地域ブランド「宮崎牛」のさらなる知名度アップに取組んでいるところです。宮崎牛の豊潤かつ高級な味わいは、国内はもとより海外においても高い評価を受けております。是非とも一度ご賞味下さい。

宮崎牛



このコーナーに掲載御希望の方は、「特産品」のプロフィール・連絡先をFAX:03-3519-2706までお送り下さい。

名古屋城 ▶

最近よくいわられるのが「いいねー、名古屋は景気がよくって」。確かに名古屋圏は、2005年の中部国際空港の開港や、愛・地球博の開催といった大規模プロジェクトを起爆剤として、商業地の地価上昇率では名古屋駅前が4年連続で全国トップ、有効求人倍率は全国平均の2倍以上と勢いがあります。また最近元気なのが名古屋めし。みそかつ、ひつまぶし、あんかけスパなどなど。その独創性がうけています。さらに名古屋駅周辺は、高層ビルの建設ラッシュで景色も都会らしくなりました。

自動車産業をはじめとする製造業や名古屋めしなど、何かと「創り出す」ことに関わっているこの地域。東海支部所属の弁理士はこれら創り出されるものを知的財産分野からサポートするべく熱意をもって活動しています。東海支部としての活動も無料休日パテントセミナーの開催や、特許無料相談の実施、学生を対象にした知的財産教育支援など多くの知財活動を行っています。弁理士4年目の私はこれらの活動の勢いに圧倒されるばかりです。

しかしいくら高層ビルが建って都会らしい景色になっても、根底は未だに「偉大なる田舎」。人間味あふれるこの街を大いに楽しんで生活しております。



シリーズ 24 弁理士風土記 (愛知)

コーテック国際特許事務所
弁理士 水野祐啓

名古屋の街並み

ジャーナリスト こぼれ話



昆虫の不思議

都会にいると特定の昆虫以外は、目にする機会が減っている。美しい蝶や一部のカブトムシのような甲虫は比較的人気があるようだが、全ての昆虫が嫌いといふ人も少なくない。しかし、人間は昆虫を昔から利用しようという研究も進んでいる。農業利用されている昆虫も多く、受粉の花粉媒介にはミツバチやマルハナバチが使われている。また、作物を食べてしまふ害虫を駆除するために、その天敵昆虫が使われている事もある。生活に身近なものとしては、蚕は繭が絹糸生産に、ミツバチは蜂蜜を取ることに使われている。最近では、昆虫を直接利用する以外にも、その体の色や構造、視覚特性などを利用しようという研究も進んでいる。

モルフォ蝶は南米に生息する大型の蝶で、金属光沢のある美しい青い羽を持つているが、この羽の色は色素ではなく鱗粉の構造による「構造色」だという。それを応用して開発された繊維は、染料を使わずに独特な色を発色する。

先日訪れた昆虫の展示施設では、蝶が温室を優雅に飛び回っていた。虫が嫌いでなければ生きた蝶もお勧めしたい。

(鈴木)